張國光『《水滸》與金聖嘆研究』

河南省　中州書畫社　一九八一年九月　三五五頁

この書は、著者・張國光氏がここ二五年餘りの間に各誌に發表してきた、水滸傳や金聖嘆に關する論稿を集成したものである。論稿の大部分は金聖嘆の水滸批評を論じたものだが、その西廂記批評を論じたものが二篇、金聖嘆とは直接關係のない、水滸傳周邊の諸問題についての考證的な文章が四篇ある。先ず金聖嘆の水滸批評を論じたものを取り上げよう。

周知のように、金聖嘆は『水滸全傳』の後半四十九回分を「惡札」と稱して切り捨て、七一回に、英雄たちが梁山泊に勢揃いする所までが眞正の古本水滸傳だとして、七十回本を作り出した（全傳本の第一回を、「楔子」と稱して聖嘆本第一回の前に置いた）。この處置の是非をめぐって、古來議論が絶えないが、この書の著者は全面的に是認する立場である。その論據は次のようなものである。この部分には、宋江の、招安を受け入れ、梁山の革命政權を敵に賣り渡す路線が一貫している。梁山泊での勢揃いの段階から宋江は畫策を始め、李逵等の反對派を押さえつけ、種々卑屈な手段を弄して招安を實現する。その後、英雄たちは、政府に體よくあしらわれるのに腹を立て、何度か決起しかけるが、その都度宋江に押し止められる。宋江は、己れの死後、李逵が再び反するのを恐れて、豫め彼に毒酒を呑ませることまでしている。三度の起義軍鎭壓のしかたも、殘酷で假借のないものである。このように水滸の後半部は、朝廷に投降し、その手先となって働くことを宣傳していて、古典文學作品でも他に類のない〃反動的糟粕〃であり、金聖嘆が切り捨てても何ら惜しむに足りないのである（以上、主として同書「被金聖嘆〃砍〃去的『忠義水滸全傳』的後四十九回究竟寫了什麼？」の論旨）。

しかし水滸傳の作者が、招安を受けて他の起義軍の鎭壓に奔命し、果ては自らの隊伍を瓦解せしめる過程を描くからといって、作者がそうしたいき方を宣傳・奬勵しているとは限らない。宋江起義のような隊伍は、現實にはこうし

た過程をたどりがちであり、水滸傳もこの種の歴史的狀況を反映しているに過ぎない（拙稿「水滸傳の後半部について」――『日本中國學會報』二二參照）。尙且つ、この書の末尾を覆う暗澹たる雰圍氣などから、作者は、英雄たちの悲劇的な末路に深い哀惜を寄せているように評者には思われる。

とにかく著者は後半部をかく評價した上で、『水滸全傳』一書は投降主義を主題とすると決めつけ、明代後期の農民軍に惡影響を與えてそれが內部から崩壞するのを助長したり、統治者に、單純な討伐よりも招安の方がより有效であることを學ばせたりしたという。そこで金聖嘆は著者によれば、「革命の腐蝕劑を革命の教科書に變えるために」（一七四頁）、七一回以後を切り捨て、前半部にも相應の修改を施した。特に重要なのは、宋江に關するものである。著者の見るところ、金聖嘆の修改により、宋江像は次のように變わった。宋江は早くから「內に異心を蓄え」、私かに晁蓋等を逃がしたのは、將來の自分のために梁山泊の根據地作りをさせようとしたのであり、宋江が反詩を吟じたのは、つまりその眞心の暴露である。また「專等朝廷招安」の類の投降言論は、眞心から出たものではなく、人々を水泊に誘い入れるための方便である。かくて金聖嘆によって前半部での宋江の投降思想は除去され、後半部での投降行動が切り捨てられたことと相俟って、宋江は徹底した〝造反英雄〟に改造された。以後金聖嘆本は廣大な讀者に迎えられ、一方その影響力を恐れた當局者によってしばしば禁毀處分にされた（以上、主として「兩種《水滸》、兩個宋江」、「金聖嘆批改《水滸》的貢獻」）。

しかしこの點も評者には納得できない。先ず全傳本が革命の腐蝕劑となったというのは、具體的には全傳本が、宋江は「生時は錦を衣て官に封ぜられ、死後は千秋に廟祀せられ、名は靑史に垂る」と盛稱するのに、方臘や王慶・田虎は「個個首を隕し身を戕い、幷びに凌遲處死、三族を誅滅せらる」と呪罵するので、革命人民は投降が最良の道だと思ってしまうことを指す（一九三頁）。しかし端的に言って、その先には隊伍の瓦解や自らの死しかない宋江のようないき方を、一體どこの革命軍の指導者が最良の道だと思うだろうか。金聖嘆によって宋江が造反英雄に改造された

という著者の說も解らない。全傳本の宋江は、元來忠君意識の持ち主であり、主動的に亂を起こす氣はなく、種々の事情で止むなく梁山に上るが、贖罪の觀念から招安を待望し、征四寇に從事する。その思想と行動の是非はともかく、それなりに終始一貫したものである。著者のいうように、金聖嘆本は宋江を徹底した造反英雄にしたて上げているとすると、宋江の忠君意識や梁山になるべく關わるまいとした態度は、全て本心を隱した見せかけだったことになるが、そういう色眼鏡で宋江の言動を見直しても、なかなかそうは思えてこない。假にそうだとしても、宋江はなぜそれ程までに本心を隱したのだろう。そもそも一體何のために主動的に亂を起こす氣になったのだろうか。たとえ著者の言う通りだとしても、金聖嘆はリアリティに乏しい、極めて觀念的な宋江像をしたて上げたことになる。

評者の考えでは、金聖嘆は却って宋江を憎惡・攻擊している。批文中で宋江の言動の一つ一つを取り上げて難癖をつけるばかりでなく、自ら撰んだ卷頭の序「二」や「宋史綱」「宋史目」、「讀法」でも宋江を敵視し、彼らが朝廷と對抗したり、招安を受けたりするのを容認しない論を展開している。のみならず卷尾に、盧俊義の夢の中で、英雄たちが一齊に處斬されるという場面を附加して一書の結末とした。これらの點を總合すると、金聖嘆は梁山泊軍の貪官汚吏誅罰は支持しても、それが官兵・王師を拒殺するのは容認できなかったのではないか（拙稿「金聖嘆の水滸傳觀」――『野草』4參照。但しここで一概に「金聖嘆は水滸起義に反對している」と說いたのは不適切で、彼は梁山泊軍の軍事行動のどこまでを支持し、どこからは容認しなくなったと分けて考えるべきだろう。因みに張國光氏も「皂白不分、是非難明」の一文で、梁山泊軍の、祝家莊惡霸誅殺の擧に金聖嘆が極めて好意的であると論じている）。しかし著者に言わせると、宋江を非難する批文や卷首の反動的な序文、末尾の處斬の場面などは、金聖嘆の本心から出たものではなく、禮教の束縛が强く、特務の嚴しい監視の下で言論が禁壓された當時にあって、自らは文字の獄を逃がれ、かつ修改した水滸傳が廣く刊行されることを企圖した僞裝であり、〃保護色〃であるという（以上の〃保護色〃論は主に「去僞存眞、由表及裏」、「別出心裁

的文學批評」に見える)。しかし自説に都合の悪いところは〝保護色〟などと言って切り捨てるやり方にはどうしても承服しかねる。先ず金聖嘆の見方全てをトータルに説明できる觀點を追求することこそ、研究者の任務ではないだろうか。

もし著者のいうように、金聖嘆は水滸傳を眞の革命文學に變えたとすると、その進歩的な觀點はどこから出てくるのか問題となる。著者はこれに答えるべく、筆記、雜史、地誌その他の資料を引用して當時の歴史的・社會的狀況や、有數の文化都市であった、金聖嘆の故鄕蘇州の自由な雰圍氣を再現しようと努め、他方金聖嘆の撰んだ水滸批、西廂批はもとより、部分的に殘っている杜詩批、唐詩批、その他の批評文、果ては詩文に至るまで廣く目を通し、金聖嘆の日常生活の模樣や、その哲學思想、社會思想に迫ろうとしている(主として「我國傑出的啓蒙思想家金聖嘆」「金聖嘆是封建反動文人嗎?」「論金聖嘆的詩及其反清思想」に見える)。但し個々の論點には賛成しかねるものもある。特に次の一點はそうである。一六六一年、順治帝の哭臨の席で、蘇州の民衆はかねてから惡德を縱にしていた縣令を彈劾する集會を開いたが、中國統一を完了したばかりの清朝は、治安强化の觀點から關係者を大量に處刑した。金聖嘆も首謀者の一人と見なされて犧牲となった。「哭廟案」として知られる事件であるが、金聖嘆はこの時、まきぞえを食ったのだというのが從來の有力な見方だったように思う(關連する資料は陳東原「金聖嘆傳」に多く集められている)。これに對してこの書の著者は、金聖嘆はこの事件の主體的な參加者、組織者であったという説を打ち出している(九三—四頁、一一七—八頁)。なるべく自説に都合のよい資料を引用したように見受けられるが、尙且つこれだけの證據からこう斷ずるのは早計であろう。重要な問題なので、より愼重な筆の運びが望まれる。こうした問題點を持ちながらも、從來はせいぜい水滸批を讀んだくらいで、金聖嘆を〝封建反動文人〟と決めつける論調が多かったのだから、資料の博搜の上で金聖嘆の全體像に肉迫しようとした著者の努力は高く評價されてよいと思う。

金聖嘆は水滸、西廂その他の批文を通じて、文學理論や

文章技法上の様々な問題を提起している。これについては、今までも部分的な指摘はなされてきたが、著者はこの問題を全體的、體系的に取り上げ、先人の業績を遙かに越えることとなった（「金聖嘆關于藝術規律的理論初探」）。例えば、長期にわたる、深い生活觀察を元にして作家は物事を描寫すべきである（所謂「十年格物」の說）、事物の多樣性を認識し、物語のやまば以外の細節の描寫もおろそかにすべきでない、登場人物の階級や家庭環境に相應しい言葉遣いをさせるべきである、といった金聖嘆の考えが指摘されている。

金聖嘆の西廂記批評を論じた二篇（「有比較纔能鑑別」、「傑出的古典戲劇評論家金聖嘆」）の論旨は、概ね妥當のように思われる。著者によると、王實甫西廂記は、科白の部分によく草率・杜撰な個所があり、金聖嘆は大抵それをよい方に改作している。例えば、張生の受けた心の痛手を癒すべく鶯鶯から〃處方箋〃がとどけられる場面、

〔末看藥方大笑科〕〔末云〕早知姐姐書來、只合遠接。

（第三本第四折）

「立役、處方箋を見て大笑いするしぐさ」〔立役〕ねえさんのてがみとわかっていたら、受取りにわざわざ出向いたものを。これが金聖嘆本では、この時の張生の心理狀態をよく反映する、次のような科白に變わった。

〔張生開讀。立起〕〔笑云〕我好苦也、是一首詩。〔揖云〕早知小姐詩來、理合跪接。紅娘姐、小生賤體、不覺頓好也。

〔張生、開いて讀み、立ちあがり〕〔笑って〕何とまあ、一首の詩だぞ。〔敬禮して〕お嬢さんの詩とわかっていたら、平伏拜受したものを。紅娘ねえさん、わたしのこのからだ、何となくにわかにしゃんとした。

こうした修改により、筋の運びはより合理的に、人物の性格はより明確になったという。金聖嘆は曲辭にはそれほど手を加えていないが、曲律の束縛のため意味が通じ難くなっている個所などを修改し、幾分曲調の規律を損いながらも意味がよく通るようにした。その批文も精彩に富み、特に鶯鶯の性格分析は行きとどいている。鶯鶯は自ら張生を呼び寄せながら、嚴しく叱責して去らせる《賴簡》の場面なども、金聖嘆の解釋によって鶯鶯がなぜそうしたのかが

よく解るという。

金聖嘆は西廂記の後四折を、別人の續けた「庸筆」、「醜筆」であると貶しめ、第四本第四折の《驚夢》を以て一書の結末とした。このことを著者は、「衣錦榮歸」的大團圓を切り捨て、封建社會に生きる青年達の愛情は必ず摧殘されずにはおかないことをいう悲劇に變化させたのだと評價する（二八七頁）。たとえそうだとしても、たまたまそうなったというだけで、金聖嘆の功績といったものではなかろうが、著者が、後四折を切り捨てた金聖嘆の見識を稱えることに異議はない。

金聖嘆の西廂記批評を正面から論じたのは、おそらく著者が始めてであり、その草創の功を認めるのに吝かであってはなるまい。

考證的な文章の中で、特に「魯迅以來盛行的《水滸》簡本〃加工〃爲繁本說的再討論」が、論旨明快で說得力があるように思われた。これは魯迅・胡適以來の、水滸傳の簡本に加工して繁本となったという說と、繁本を刪節して簡本ができたという說の論爭・展開史を跡づけつつ、直接には聶紺弩氏の一文を批判する形で後者の說を主張したものである。

「《歷史的宋江不是投降派》一文質疑」と「再質疑」の二文は、歷史上に實在した宋江の事跡を論じたものだが、これには疑義がある。この問題に關しては、わが宮崎市定氏に一說があり（「宋江考」――『東方學』三四）、比較對照してみよう。宮崎氏は、宣和三年五月に張叔夜に投降した宋江（A）と（『東都事略』に、「（宣和三年五月）宋江擒に就く」とあるのに基づいている）、宣和三年四月に方臘の根據地・幫源洞の、同六月に餘衆の立てこもる上苑洞の包圍作戰に從った宋江（B）とは別人であると見なしている。これに對してこの文では、『宋史』徽宗紀その他によって、宋江が張叔夜に投降したのは宣和三年二月であると見なし、その宋江が同年四月と六月の對方臘戰に參加したのだとする（宋江（A）＝宋江（B）となる）。宮崎氏は前掲『東都事略』の一條をきちんとした根據を擧げて採用しているが、この文ではこの一條は誤說であると片づけられている（八五頁）。概してこの文では「宋江（A）は宋江（B）と同一である

ことに矛盾は生じない」ことを證明するのに力點が置かれ、宋江（A）は宋江（B）と等しいことを積極的に論證しようとする姿勢は見られない。宮崎氏はかなり效果的に「宋江（A）は宋江（B）に等しくない」ことを論じているのだから、この點は避けて通れないはずである（著者が宮崎説を知っていることは、「再質疑」末尾にそれを引用していることから判る）。なお宮崎氏は「折可存墓誌銘」に見える宋江を、その生擒された年月を定めずに宋江（A）と同じとしたが、この文では、この年月は宣和四年であるから、これだけは別の宋江であるとして、やはり宋江は二人いたという立場を取っている。

紙數の都合で四、五篇の論稿に觸れ得なかったが、この書の內容の大要は紹介し得たと思う。なお卷末の附錄として、金聖嘆の水滸批に關する從來の説の摘要などが收められている。

（愛知教育大學　中鉢雅量）